

## 学位論文概要書

鈴木 健司

本書に収めた諸論考は、拙著『宮沢賢治 幻想空間の構造』（蒼丘書林、平6・10）、『宮沢賢治という現象』（蒼丘書林、平14・5）をもとに再編集したものである。収録にあたっての私の意図は、次の三点である。

- 一、修士論文『宮沢賢治研究』（早稲田大学教育学研究科提出、平4・3）以後に執筆した論考であること。
- 二、本書の副題として示した『文学における宗教と科学の位相』に添う内容を含むこと。
- 三、年譜的研究は副題の主旨に直接添うものではないが、宮沢賢治のより正確な実像を知る資料的価値を考慮し、間接的にはあるが第二の基準に合致すると判断し、収録すること。

\*

宮沢賢治に関して、これまで夥しい数の作家研究・作品研究が世に提出されてきた。その大海に私の研究がどれほどの意味を具え浮び得ているのか、心もとないかぎりである。ただ、私には、賢治研究を始めた当初よりほぼ一貫して抱き続けてきた課題がある。それは宮沢賢治の文学における宗教・科学の問題である。宗教的であることがなぜ文学であることを保証するのか、科学的であることがなぜ文学であることを保証するのか。

先行研究において、宗教や科学の問題が論究されてこなかったわけではない。私自身その恩恵を多いに受けているものの一人であるが、かならずしも、賢治や賢治作品における宗教や科学の問題が、文学との関わりにおいて追究されてきたとはいえないように考えている。宮沢賢治の作品には文学・宗教・科学の三位一体ともいうべき特徴があり、その深さ・複雑さが、多くの読者を魅了し、かつ多くの研究者を悩ませてきたのではないか。これまでの日本近代文学史において宮沢賢治が正統に理解・評価され得なかった理由もまたこの辺りにあると指摘できるだろう。文学的事実であることと宗教的事実であることと科学的であることが、なぜ互いに矛盾を起ささないのか。私の研究に多少の意味があるとすれば、その問題意識を持ち続けてきたという一点に尽きるかもしれない。

本書は、序論、第一部「詩研究」、第二部「童話研究」、第三部「比較研究」、第四部「周辺研究」という構成からなる。収録した論文数は序論を含め十六本である。

序論として置いた『心象スケッチ』の目的 田中智学とウィリアム・ジェームスの視点から「は、賢治の創作理論に関する論考である。その意味で、第一部から四部に収めた緒論を基礎的な部分で支えているものである。

第一部「詩研究」には、『青森挽歌』（『春と修羅』第一集）に関する論考二本と、「（北っぱいの星ぞらに）」（『春と修羅』第二集）に関する論考二本を収めた。両詩篇とも賢治の思想・体験が複雑に織り込まれており、『春と修羅』第一集、二集をそれぞれ代表する作品となっている。また、第三部で扱う「銀河鉄道の夜」の成立とも内部で深く関わっており、賢治文学における詩と童話という二つのジャンルの生成に関わる根源的な課題も照射することになる。

第二部「童話研究」は、最も難解とされる「銀河鉄道の夜」一篇に研究対象を絞り、それぞれ異なった視点から書かれた四つの論考を並立させることで、賢治文学の多面性・多様性に対応することを目指している。四つの視点とは、賢治の《空間》意識、日蓮主義者としての賢治、キリスト教への違和と親和、往く者と残される者、の各課題である。

第三部「比較研究」は、賢治作品の近代文学としての普遍性を明らかにすることを目指し、現代作家との比較研究を試みている。対象とした作家は、坂口安吾・遠藤周作・大江健三郎の三人である。これまでほとんど試みられることのなかった領域であるが、それぞれ賢治文学との通底性が明らかで、ある意味、賢治文学の後継者と見なすことができる作家たちである。

第四部「周辺研究」には、年譜的問題を扱った論考を一本と、受容史的問題を扱った論考を三本を収めた。新資料としての近森善一（童話集『注文の多い料理店』の刊行者）へのインタヴューテープの発掘は、等身大の賢治を知る上での貴重な資料となるはずである。賢治受容に関しては、同時代の詩人岡本弥太の賢治受容、《宗教的欲求の時代》としての現代における賢治受容、《聖人》賢治像への反発から生じる反動的な賢治受容を取り上げ検証することにより、賢治受容の複雑・多様なあり方を明らかにすることを試みている。以下、本書に収めた諸論考の梗概を記す。

## 序論

《心象スケッチ》の目的 田中智学とウィリアム・ジェームスの視点から

賢治の作品は《心象スケッチ》という独自の創作方法のもとに成立をしている。賢治の考える《如来の表現》という創作目的と《心象スケッチ》という創作方法とが、賢治のなかでどのように関連づけられていたのか。幻覚・幻聴の所有者である賢治が《心象》を《スケッチ》するに至った過程を、国柱会田中智学の『本化妙宗式目講義録』における無意識部の解釈と、心理学者ウィリアム・ジェームスの『宗教的体験の諸相』における無意識部の解釈との関連で考察する。結論として、賢治はウィリアム・ジェームスの心理学を、田中智学のいう「第九識菴摩羅識」（本仏の識）の科学的な検証方法として採用、その検証材料として自己の《心象》を《スケッチ》した、とする。

## 第一部 詩研究

### 第一章「青森挽歌」研究・1

《心象スケッチ》の時と場所 再構成された体験

詩「青森挽歌」にスケッチされた賢治の心象や車窓からの風景は、二五〇行を超える詩作品内部においてかならずしも読者に一貫した解釈を許すものでなく、これまで様々な解釈の揺れを生じさせてきた。本論においては、詩内部の矛盾を《心象スケッチ》のもつ必然的矛盾とする解釈の立場から、《心象スケッチ》としての「青森挽歌」の時と場所に関し、「さびしい停車場」の時と場所を中心に再構成された体験として創出された可能性を追究する。その論証過程で、汽車は「さびしい駅」を通過中であつたという新見解や、乙供駅という現実の駅の想定を導入する。

### 第二章「青森挽歌」研究・2

「ヘツケル博士！」の解釈をめざして 唯物論と唯心論との狭間で

詩「青森挽歌」における最大の謎とされる「（ヘツケル博士！／わたくしがそのありがたい証明の／任にあたつてもよろしうございます）に關し、先行研究としての小野隆祥の論を再評価する立場から、恩田逸夫や龍桂花、大塚常樹の諸論に対しその問題点を検証・訂正し、同時にヘツケルの著作の精密な読解をもとに、それまで解決をみることのなかった靈魂死滅説と靈魂不滅説との解釈上の対立に決着をつける。最終的に問題の詩句に關し、《魔》が賢治の誇大化された分身であるヘツケル博士に向つて、「ヘツケル博士！／わたくしが、妹とし子さんの天界への往生という、ありがたい証明の任にあたつてもよろしうございます」と語つたもの、という解釈を提示する。

### 第三章「北いっばいの星ぞらに」研究・1

《異の空間》と《銀河の窓》の意味するところ 科学的宇宙觀と仏教的宇宙觀

詩「北いっばいの星ぞらに」は六種類の下書稿をもつ複雑な詩篇であり、下書稿に見出される《異の空間》や《銀河の窓》は、童話「銀河鉄道の夜」を読み解くキーワードでもある。本論では「先駆形A」「先駆形B」とよばれる下書稿段階での用語の書き換えや意味の差異に着目し、「先駆形A」から「先駆形B」への書き換えは、対象となる宇宙空間の拡大を伴う本質的な書き換えであり、科学的空間としては《太陽系》から《銀河系》へ、仏教的空間としては《天界》から《仏界》へと拡大し、それぞれ、銀河＝宇宙說から島宇宙說へ、俱舍論から華嚴經へと、認識の核となる思想を移しながら書き換えがなされていたとの解釈を提示する。

### 第四章「北いっばいの星ぞらに」研究・2

《一七九》草稿群の成立と解体 転生する《心象》

詩「北いっばいの星ぞらに」に關し、その六種類の下書稿が新たに三段階に区分できることを指摘し、それぞれの下書稿段階が《地上ヴァージョン》《天界ヴァージョン》《仏界ヴァージョン》という三種に該当することを論証する。さらに、それらの三段階の下書稿はあたかも《転生》する《心象》を示していること、また、必ずしも時間の経過にそつたものでなく、賢治の内部では、各ヴァージョン段階でスケッチされた《心象》が共時的存在として響きあっていた可能性が指摘できるとし、賢治における改稿の本質的意味に迫る。

## 第二部 童話研究

### 第一章「銀河鉄道の夜」研究・1

銀河世界の成り立ち 神話（宗教）・科学・心理

「銀河鉄道の夜」に描き出された銀河世界は、極めて解釈の困難な空間として存在している。おそらくそこは、宮沢賢治という作家の宗教性や科学性、さらには心理学的特性といった要素が、原型をとどめぬほど複雑に溶け合つて成立している世界である。「銀河鉄道の夜」の難解さの一因が銀河世界の複雑さにあるという視点に立ち、銀河世界の成り立ちや構造性を、「神話（宗教）」としての銀河世界、「科学としての銀河世界」、「心理としての銀河世界」という三つの観点から分析・検証していく。「神話（宗教）」としての銀河世

界」では主人公ジョバンニの銀河世界の認識のありように注目し、それが科学者賢治としてではなく宗教者賢治としての認識を示していること、「科学としての銀河世界」では銀河世界を支える《エネルギー論》に注目し、当時最新の科学としてあった《原子論》との関係を精査、賢治の科学的知識は必ずしも当時最新のものでなく、基本的には盛岡高等農林学校時代の『化学本論』（片山正夫著）のそれであったこと、「心理としての銀河世界」では賢治のさまざまな心理学的特性に注目し、それが銀河世界の成立とどのように深く関わっていたか、などを検証する。

## 第二章「銀河鉄道の夜」研究・2

### 《ジョバンニ》の行方 日蓮主義による世界統一の夢

「銀河鉄道の夜」にはテキスト上、キリスト教への親和的要素が数多く見出される。本論ではまず、作品の底に潜められた思想が、当時賢治が傾倒していたファシズム的日蓮主義者・田中智学の思想に近しいものであることを立証し、本作品もまた押野武志（『宮沢賢治の美学』）のいう《美学化》の危険性を内包した作品であることを指摘する。その上で、主人公ジョバンニが少年として設定されていることの意味を問い直すことにより、「銀河鉄道の夜」のテキストが主張している思想は、結果としてファシズムへの傾斜をまねがれたものであったと結論づける。

## 第三章「銀河鉄道の夜」研究・3

### 「たった一人の神さま」というディレンマ 賢治と宣教師ミス・ギフォード

「銀河鉄道の夜」にはキリスト教と仏教（法華経）との対立の問題が指摘できる。賢治はそれにどのような結末を与えたのか。本論では、まず賢治の信じた日蓮の宗教とキリスト教との関係を考察し、その上で、キリスト者「かほる」のモデルとして宣教師ミス・ギフォードという女性の存在を取り上げ、賢治との関わりを軸に、「銀河鉄道の夜」のもつ宗教的課題について分析を進めていく。結論として、賢治は自己をジョバンニとして信仰を確立する以前の年齢に引き下げることにより、ミス・ギフォード（かほる）との宗教的対立を回避したとする。

## 第四章「銀河鉄道の夜」研究・4

### よだかからジョバンニへ 《よだか》の系譜

ジョバンニという一人の孤独な少年が銀河世界を旅するという作品構造は、その原型を初期作品としての「よだかの星」に見出すことができる。本論は、先行研究の天沢退二郎の論を受け継ぐかたちで、地上に戻ることに許されなかったよだかが、どのようにしてジョバンニとして地上に戻ってきたのか、その根源的な回転を問う。具体的には、私が《よだかの系譜》と呼ぶ、「北いっぱいの星ぞらに」「黄いろのトマト」「十力の金剛石」などを比較対象作品として取り上げることにより、よだかからジョバンニへの変化を賢治の最終的にたどりついた思想的着地点として立証していく。

## 第三部 比較研究

### 第一章 坂口安吾小論 《救いのなさ》ということ

坂口安吾は「教祖の文学」において、小林秀雄を批判するに宮沢賢治の詩「眼にて云ふ」を引き合いに出した。その事実からすれば、安吾は、賢治以外であつては小林批判の企図を果たし得ないとの判断を有していたことになる。おそらく、安吾が賢治に見出したものは、小林批判に止まらず広く日本近代文学に対峙するものとしての何かであつた。本論では、「教祖の文学」を糸口に、安吾と賢治という一見相反したイメージに包まれた二人に通底する《文学》の問題を、「桜の森の満開の下」と「土神ときつね」を比較・検討作品として取り上げ、追究していく。

## 第二章 遠藤周作小論 神の温もりと神秘主義

遠藤周作に「賢治の『グスコープドリの伝記』」という作品論がある。遠藤はこれ以外に賢治に関する評言を残しておらず、かつそれが賢治論として顕著な特質を示しているわけでないということもあつて、これまで、遠藤周作を賢治と比較して論ずるということがほとんどなされてこなかった。本論ではまず、遠藤の賢治論の意義を神秘主義の視点から再検討し、遠藤が賢治作品に見出したところの神秘主義が、キリスト教文学者としての遠藤自身の抜き差しならぬ文学的課題であつたことを立証する。そのうえで、『沈黙』『死海のほとり』の作品分析を通じ、遠藤の試みた神秘主義との固有の格闘とその文学的成果を照らし出す。

## 第三章 大江健三郎小論 反転の思想

第二部第四章で、「よだかの星」に関し、「落下し草むらにその遺骸を横たえるよだか」の存在という問題を提起した。「よだかの星」執筆時における賢治は思想的に未だ、よだかの「遺骸」を凝視することができず、その存在をテキスト上に残すことができなかったとの解釈にもとづくもので、そのことが作者をして「銀河鉄道の夜」の成立へと導かしめる内的動機となつたと考えたのである。本論では、その前半において、大江健三郎の『万延元年のフットボール』が「よだかの星」の問題を引き継いだ作品として読み得ること、さらには「銀河鉄道の夜」に比肩し得るものとして構想された作品であることを論じる。後半では、大江の作家としての到達点と見られる『燃えあがる緑の木』を取り上げ、そこに神秘主義という賢治的課題の存在を確認し、作品に頻出する「てんかん」の病的文学的意義付けの分析を通じ、大江の現代作家としての果敢な取り組みを検証する。

## 第四部 周辺研究

### 第一章 童話集『注文の多い料理店』発刊をめぐる 発行者・近森善一の談をもとに

高知県野市町出身の近森善一の名は、童話集『注文の多い料理店』の発行者として知られるが、これまでの評伝研究においては、賢治との関係や童話集出版の経緯に関し多々不明・疑問な点が残されていた。本論では、近森に関する新資料二点、近森の高知県立農学校時代の教え子小松亮氏が記録していた聞き書き（昭和二六年）、窪川町にお住まいの長谷部伸作氏（土佐賢治の会会長）が録音・保管していたインタビューテープ（昭和四一年）を紹介し、価値ある幾つかの新事実を公開することを通じ、評伝研究発展の一助となることを目指す。

## 第二章 詩集『春と修羅』の同時代的受容 土佐の詩人・岡本弥太の宮沢賢治理解

本論の目的は、岡本弥太という宮沢賢治と同時代を生きた土佐の詩人が、いかに卓越した賢治文学の理解者であったかを明らかにすることにある。弥太は生前、賢治に関する三種の文章を書き残している。そのうちの一つは賢治研究者にとって未見のものであり、またそれとは別の一つは弥太研究者にとって未見のものである。新資料を含むそれら三点の賢治論を読み解くことにより、同時代において弥太のみがよく捉え得た、「複眼的宗教」詩人としての賢治理解のありようを分析・紹介していく。

## 第三章 《宗教的欲求の時代》と賢治受容 宮沢賢治生誕百年の喧騒

宮沢賢治生誕百年における研究界・出版界の動向をまとめつつ、そこに立ち現れてくる現代における賢治受容の特質を、その危険性を含め問題提起していく。まず、管見の範囲で最も辛口の賢治批判であった吉田司の「遊民のバーチャルランド」（「文学界」）に注目、その上で現代を「宗教的欲求の時代」と捉え返すことにより、現代の賢治論をリードする諸家が、島蘭進（『精神世界のゆくえ』東京堂出版）のいう「霊性的知識人と一致することを指摘する。結論として、吉田が賢治その人に向けた批判は、むしろ研究者を含む現代の賢治受容者に向けられた批判として有効なもので、その陥りやすい精神類型からわれわれがどのように自由であり得るかが、熟慮されねばならない課題であるとする。

第四章 「批評空間」における宮沢清六氏批判の言説 宮沢賢治の法華経信仰と国柱会「批評空間」（14、平9）に掲載された「【共同討議】宮沢賢治をめぐる」における宮沢賢治・清六批判を取り上げ、その主張の根拠を洗い直す作業を通じて、討議者たち（柄谷行人・関井光男・村井紀・吉田司）の学術的言説の危うさの所在を明らかにする。討議者たちは、賢治 聖者伝説 に対する批判を急ぐあまり、学問的根拠のないまま、その矛盾を遺族に向けてという過ちを犯しており、そのような方法では、決して本来の目的である賢治 聖者伝説 の突き崩しを果たすことができないと主張する。

## 初出一覧

### 序論

《心象スケッチ》の目的 田中智学とウィリアム・ジェームスの視点から  
日本近代文学会一九九四年度秋期大会の口頭発表用に書き下ろしたもの。発表原題は「心象スケッチの目的」

## 第一部 詩研究

### 第一章 「青森挽歌」研究・1

《心象スケッチ》の時と場所 再構成された体験

原題は「詩『青森挽歌』における《心象スケッチ》の時と場所 再構成された体験」

（「高知大國文」第30号（高知大学国語国文学会、平12・3）

## 第二章 「青森挽歌」研究・2

「ヘツケル博士!」の解釈をめざして 唯物論と唯心論の狭間で

原題は「詩『青森挽歌』試論 『ヘツケル博士!』の解釈をめざして」(「人文科学研究」第7号、高知大学人文学部人間文化学科、平12・7)

## 第三章 「北いつぱいの星ぞらに」研究・1

《異の空間》と《銀河の窓》の意味するところ 科学的宇宙観と仏教的宇宙観

原題は「『北いつぱいの星ぞらに』試読」(「日本近代文学」第49集、日本近代文学会、平5・10)

## 第四章 「北いつぱいの星ぞらに」研究・2

《一七九》草稿群の成立と解体 転生する《心象》

「国文学」第41巻7号(学燈社、平8・6)

## 第二部 童話研究

### 第一章 「銀河鉄道の夜」研究・1

銀河世界の成り立ち 神話(宗教)・科学・心理

書き下ろし。ただしその一部には「宮沢賢治『教材絵図 分子・原子』の謎」(「高知大国文」第32号、平13・12)と「『真空溶媒』論 溶媒の思想」(「解釈と鑑賞」平成13年8月号、至文堂)が取り込まれている。

### 第二章 「銀河鉄道の夜」研究・2

《ジョバンニ》の行方 日蓮主義による世界統一の夢

『第二回宮沢賢治国際研究大会記録集』(宮沢賢治学会イーハトーブセンター、平14・3)

### 第三章 「銀河鉄道の夜」研究・3

「たった一人の神さま」というディレンマ 賢治と宣教師ミス・ギフォード

書き下ろし。

### 第四章 「銀河鉄道の夜」研究・4

よだかからジョバンニへ 《よだか》の系譜

「《よだか》の行方 『南京の基督』・『万延元年のフットボール』を視座に」

(「論攷宮沢賢治」第2号、中四国宮沢賢治研究会、平二・3)の第一章「隠された肉体」と、「『北上川は気をながし』」における兄妹の構図 よだか・かはせみ・はちすずめ」(「春と修羅」第二集研究『宮沢賢治学会編、思潮社、平10・3』)を合体させ、改稿・補筆したもの。

## 第三部 比較研究

### 第一章 坂口安吾小論 《救いのなき》ということ

原題は「坂口安吾小論 宮沢賢治との通底性において」(「高知工業高等専門学校

学術紀要」第41号、平9・1)

第二章 遠藤周作小論 神の温もりと神秘主義  
書き下ろし。

第三章 大江健三郎小論 反転の思想

「《よだか》の行方 『南京の基督』・『万延元年のフットボール』を視座に」  
（「論攷宮沢賢治」第2号、中四国宮沢賢治研究会、平11・3）の第三章「生かされる肉体」を前半部に用い、後半部はあらたに書き足した。

#### 第四部 周辺研究

第一章 童話集『注文の多い料理店』発刊をめぐって 発行者・近森善一の談をもとに

「言語文化」第13号（明治学院大学言語文化研究所、平8・3）

第二章 詩集『春と修羅』の同時代的受容 土佐の詩人・岡本弥太の宮沢賢治理解

原題は「土佐の詩人・岡本弥太の宮沢賢治理解 測定された一つの宇宙（新資料を踏まえて）」（「論攷宮沢賢治」創刊号、中四国宮沢賢治研究会、平10・3）

第三章 《宗教的欲求の時代》と賢治受容 宮沢賢治生誕百年の喧騒

原題は「平成八年国語国文学会の展望」（「宮沢賢治」〔「文学・語学」第157号、全  
国大学国語国文学会編、平9・11）

第四章 「批評空間」における宮沢清六氏批判の言説 宮沢賢治の法華経信仰と国柱会

原題は「宮沢賢治の法華経信仰と国柱会 宮沢清六氏追悼によせて」〔「注文の多い土佐料理店」第4号、高知大学宮沢賢治研究会、平13・7）